

オテンペンシャ

一個

長四十（cm）

江戸時代（推定）

春日集落個人蔵

オテンペンシャはポルトガル語の penitencia がなまったもので、告解と荒行のために使われる鞭を指す。この資料は四十六本の紐を束ねて先端に十字型の金属をつけて作られたもの。日本においては用途が異なり、象徴的な意味合いが強い。2012年に実施されたヒアリングの際、話者は本資料を「病人を祓う紐」と呼んでいた。春日集落では洗礼を行う役をお水役と称する。第二次世界大戦前は T 氏がこの役を務めていた。春日においては、オテンペンシャは病人を叩いて祓うのに使われた。

お札

一式（十六枚）

縦七 横五 厚〇.五（cm）

江戸時代（推定）

春日集落個人蔵

この小さなお札一式は、春日集落にあったふたつのキリシタン講（信仰組織）のうちのひとつが所有していた。春日集落のキリシタン講は順番でお札を預かって祀り、行事を行った。本資料は「お神様(お札)」と呼ばれ、十六枚が一組で布袋に入れられている。十五玄義をもとに描かれた絵柄は聖母マリアとキリストの生涯における出来事を示している。絵柄はそれぞれ喜び、苦しみ、栄光の三つの場面のどれかに分類される。15枚のお札はこの分類を反映しており、それぞれ三種類に分けられる記号が付いている。

16枚目のおふくろ様という札には袋の絵が描かれている。この札は聖母マリアにあたり、親札だという。

まぶり(おまぶり)

一式

まぶり一枚 縦一.八 横一.八（cm）

時代不明

切支丹資料館寄託品

「まぶり」は「お守(日本のほとんどの寺社で見られる類の小さな飾り)」の別の呼び方。方形に和紙を折り、十字を切り出す。この「まぶり」は付近の飯良集落のもの。死者への土産として持たせたり、体調が悪い牛に治療として飼料と共に食べさせたりした。他集落にも同様の「まぶり」があり、様々な行事に用いられた。

お掛け絵「受胎告知」

一巻 紙・木

縦四九 横二八（cm）

時代不明

島の館

生月島館浦のある家が所有する掛け軸の形をした信仰具。大天使ガブリエルが聖母マリアにキリストの懐妊を告げる受胎告知の場面を描く。構図の上部には雲上に父なる神がいる。絵の下部には聖母と天使が座っている。マリアの懐に本来まだ産まれるどころか懐胎すらしていない幼子イエスが描かれているのは、もとの絵画ではありえない。長年の間に何度も模写されるうち、幼子イエスが描き加えられた可能性がある。聖母は江戸時代（1603-1868）初期に流行した髪型をしている。この伝統的な場面の表現は、聖母の乳房があらわに描かれていること、天使ガブリエルの羽根が高度に写実的であること、そして豊かな色彩が用いられていることの三点で特徴的である。

「聖母子像」

この聖母子は春日集落のかくれキリシタンに代々拝まれてきた。像は開けず箱と呼ばれる木箱にメダルなど他の信仰具とともに入れられており、現在も神棚に置かれている。